

大災害の記憶、一堂に

あの日から

3.11 東日本大震災・原発事故

震災・原子力災害伝承館を取材

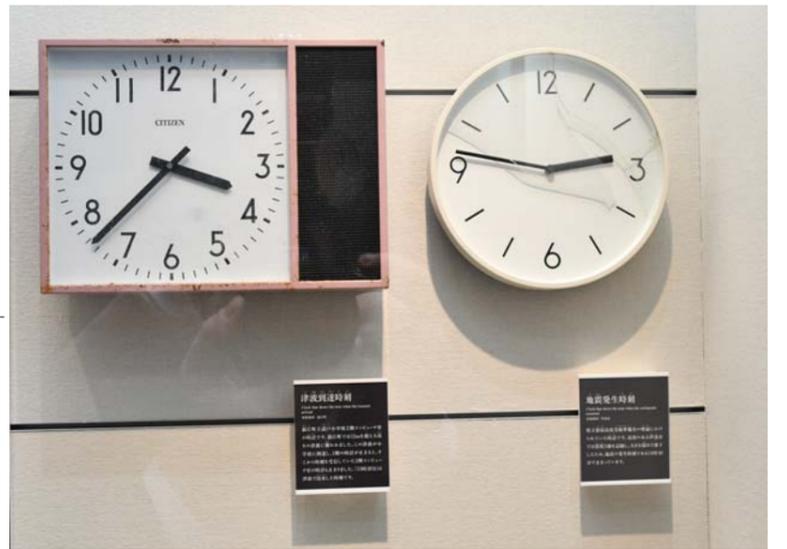
双葉の復興に理解

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から10年を経た3月13日。私たちジャーナリストスクール取材班2班は、福島県双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れ、人類史上例のない複合災害がもたらした困難、その後の復興を学びました。同館アテンダントの渡辺昌子さん(55)は、大熊町在住から震災当時の様子や避難生活の窮状について話を聞きました。(取材班2班・佐藤歌音、神谷実鈴、清水愛子、児玉琴心、吉田和叶)



伝承館で震災当時の様子や窮状を学ぶ取材班

東日本大震災・原子力災害伝承館は当初、2020(令和2)年夏に開館予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、同年9月20日に開館しました。鉄筋コンクリート造り3階建てで、館内には被災地である双葉郡などから資料約24万点を集め、その中から震災発生時刻と津波到達時刻を指し止まった時計など約170点を展示しています。「プロローグ」と題した入口のフロアから最後の「復興への挑戦」まで、震災・原発事故の記録を時系列に見ていくことができます。館内では展示コーナーで震災当時やこれまでの復興の取り組みを学ぶことができます。館外に出



震災発生時刻(右)と津波到達時刻を指したまま止まった時計

て被災した施設などを見るフィールドワークツアーもありです。また、復



伝承館前で記念撮影に納まる取材班

方々です。渡辺さんは説明しながら当時を思い出し、つらくなることもあるとのことですが、「大震災の本当のことを知ってもらいたい」という思いで日々業務にあたっているそうです。

開館以来の来館者は全国各地から3万9000人を数え、震災・原発事故の関心の高さがうかがえます。しかし、新型コロナウイルスによる海外からの入国制限で外国人観光客が来館できず、世界への発信が課題です。開館時間は午前9時から午後5時まで、火曜日休館。入館料は大人600円、高校生以下300円です。問い合わせは同館 電話0240(23)4402へ。

伝承館アテンダント

渡辺昌子さんに聞く

私たち取材班は、東日本大震災・原子力災害伝承館でアテンダントを務める渡辺昌子さん(55)に写真に古里への思いや避難生活の経験、仕事のやりがいなどについて聞きました

Q. 震災直後は何をしていますか

A. 大熊町の保健センターでケアマネジャーをしています。地震後、原発事故が起こり町が警戒区域になりました。すぐに田村市へ全町避難し、その後、会津地方、千葉県などで避難生活を送りました。田村市の船引小、デンソー東日本(現デ

「復旧」から「復興」へ



ンソー福島)に身を寄せた際は床にブルーシートを敷いただけの生活でもつらかった

Q. 原発建設の話が持ち上がった際、住民からの反対などはなかったのですか

A. 反対はありませんでした。しかし、当時は町内に働き口が少な

く、多くの町民が首都圏などへ出稼ぎに行きました。原発ができることによって、雇用が生まれます。危険かもしれないけれど、絶対安全だという「安全神話」もあつたと思います。多くの人が家族が離れ離れにならないで一緒に暮らせるなら...という気持ちだったのでしよう

Q. 仕事のやりがいは

A. 古里の現状を多くの人々に知ってもらえることです。震災・原発事故は被災地だけでなく、多くの地域に影響を与えました。この経験を将来のプラスとなるように力を尽くしたい

Q. 最後に、夢を聞かせてください

A. 被災地を震災前に戻すのではなく、新たな力を興し繁栄させたい。「復旧」にとどまることなく、「復興」の一助となるよう努力します